

---

# 極彩は踊る

ごろー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

極彩は踊る

### 【Nコード】

N1518M

### 【作者名】

ごろー

### 【あらすじ】

”色”を失った、陰謀渦巻く極彩の大陸にて。灰の帝国の次期魔帝と相成った彼女は、国を、世界を掻き乱してゆく。たった一人の近衛を連れ、知略を以って、時に力を以って。

『何も救わない”救世主”と他人の意のままの”善良な王”<sup>フェデリカ</sup>。面白

い組み合わせだと思わない？<sup>おもしろ</sup>』  
時は交差し、思惑は交わる。汝、忘れる勿れ。物語の主役が一人だけとは限らぬことを。

（章毎に視点が変わります。苦手な方はご注意ください）

## 宇宙観／地理／暦

### 宇宙観

ジャルダン・ド・ミシユラ  
女神の箱庭  
ジャルダン・ド・ラ・ジャステイス  
(正義の箱庭とも)

世界をドーム状の箱庭と考える。ちょうど中心線あたりから西が海、東が陸となっている。星は天井からぶら下がっており、太陽と月は毎日生まれては死ぬ、不変の存在。

### 地理

大陸という概念が無い。故に大陸に名前は無い。人々は島と陸で区別する。

### 暦

#### \*クレスト教圏

一年365日、12ヶ月(30日)

1:雨月  
ブリュヴィオーズ

2:風月  
ヴァントーズ

3:芽月  
ジェルミナル

4:花月  
フロレアル

5:牧草月  
プレリアル

6:収穫月  
メスイドル

7:熱月  
テルミドル

8:果実月  
フリユクティドル

9:葡萄月  
ヴァンデミエール

ブリュメール  
10：霧月  
フリメール  
11：霜月  
ニヴオース  
12：雪月

年の瀬、年明け合わせて5日間は聖日祭と呼ばれ、夜通し祭りが開かれる。帝国サルタイアーでは祈の日、盾の日、王の日、新年の日、誓の日の名がつく

\*地の民は部族によって様々な暦が存在する。但し、殆どの部族で乾季のことを『ライルの息吹』と呼ぶ等、ある程度の関連性は存在している。

## 国際

## 国際

\* 帝国サルタイアー

湾の南の平野、高原に跨って位置する。高所は比較的冷涼、低地は比較的温暖。元々肥沃な土壌の為、高原では果物や麦、低地では米や野菜、花き、茶作りがさかん。

国の紋章は、<sup>エスカッション</sup>王の盾を表す盾の中に描かれた、4つの身分を表す<sup>サルタイアー</sup>x印と魔帝を表す中心の獅子

つまり国民は魔帝によって支配され、エスカッションによって護られるという意

王都シェブロン

政治、文化、商業の中心地。王城を真南（太陽）にし、フェス川の東に邸宅地、西に商業区が広がる。フェス川から離れれば離れるほど身分の低い者の住む地区になる

次期魔帝フェデリカ

<sup>エスカッション</sup>王の盾

（近衛部隊兼政治の中枢）

・ 隊長《魔帝の狗》サルヴァトーレ  
<sup>インエスカッション</sup>政治部

・ 副帝 空席

・ 宰相 ハインリヒ・レオポルド・ヴェア

- ・内務 ヴィルヘルム・ローレンツ
- ・外務 レニアス・アーミン
- ・財務 リュドヴィーク・ダバディー
- ・神事 アンドレーア・イウラート
- ・軍事 ロルフ・クライン

皇族『<sup>オーア</sup>金の身分』

貴族『<sup>アージエント</sup>銀の身分』

大公ヴェア家

公爵アーミン家

侯爵トレッシャー家、フローンチ家

辺境伯ボーデユア家、ロズンジ家、レイブル家

伯爵

副伯

男爵

騎士『<sup>セーブル</sup>黒の身分』

市民『<sup>ヴァート</sup>緑の身分』

（聖職者『<sup>パーピユア</sup>紫の身分』もヴァートに含まれ、またセーブルとパーピユア、ヴァートとの身分的優遇差は無い）

魔帝とエスカッシャンが政治の指導権を握る

皇族貴族は官僚を務める

年に一度、花月に三部会（アージエント、セーブル、ヴァートの身分別の代表者会議、オーアのみ参加不可）が開かれ、国政への要望やエスカッシャンの人事について話し合われる

魔帝

所謂女神より祝福されし者。膨大な魔力を持ち、其の力によって民を支配する、絶対的な存在

エスカッション

所謂女神より認められし者。

慣例で政治職はオーア1人、アーリエント、ヴァート、セーブル2人ずつで構成される。オーアは魔帝が指名、アーリエント、セーブル、ヴァートは三部会で推薦されて決まる

また、必ず副帝はオーア、宰相はアーリエント、財務卿、神事卿はヴァート（パーピュア）、軍事卿はセーブルから選ばれる。これは、政治関連の仕事を、その道に秀でた身分の人材にやらせる為。年に一度、人事の見直しが行われている

近衛部隊はセーブル、ヴァートの傭兵から魔帝が直接選ぶ。何人でも良い。隊長、副隊長は実力で決められる

また、近衛部隊の隊長がエスカッションの長を勤める（皇族、貴族への権力集中を防ぐ為）。人呼んで魔帝の狗

\*教国ラウンデル

湾内部の半島に位置する。気候は比較的温暖だが雨が少ない為、特産品はオリーブ、葡萄、檸檬など乾燥に強いものに限られる。聖都はラウンデル。

国家元首は教皇。世襲制ではないが、教皇に任期はない。教皇にはド・リス名が与えられる。今の教皇の名は、ジャン・ジャック・ド・

リス

また、別に聖女がおり、絶大なる魔力を持する

『ド・リスの名を賜る者は、<sup>アイリス</sup>聖女を妻に娶る』

教皇

枢機卿10名

教民（全員聖職者）

国自体の人口は少ないが、共和国を含めると百合派自体の人口は獅子派に次いで多い

\*王国ベンドレッド

湾の西側にある島と、陸の海沿岸の一部に位置する。比較的温暖で、一年中雨が多い。そのため、牧草が育ちやすく、牧羊が盛ん。然し曇りがちな気候の為、余り農作物の種類は多くない。王都はディミニユティブ。

現在シニスター朝アルフレッド2世が治める。国王は世襲制。女性の即位は認められない為、次期国王は不在。とは言っても、王は19歳。

占い以外の魔術を一切否定する。然し、軍には魔術師で構成された魔術師対策部隊が存在する（ことは公然の秘密）。

王

貴族、皇族

聖職者

臣民

臣民と其れ以上で身分的優遇差が大きい（納税の義務の有無等）



## \* 共和国ティンクチャー

湾北岸に位置し、他のクレスト教圏3国全てと国境を接する。西部は温暖な為農業が盛んだが、東部は山がちで冷涼な為、酪農が多い。チーズを特産品としている。首都はペトラ・サンクタ。

クレスト教圏ではあるが、特定の宗派に別れてはおらず、各国の国境付近の地域にその国の宗派が信仰されていることが多い。また、東部の山間部には一部邪神派やアッシュラムス教信者がいる。

国を4つの地域に分け其処から代表を選出し、彼らの話し合いによって国が運営されている。

基本理念は、国民総市民。しかし、財力による待遇差が残る。

## \* 地の民

遊牧をして生きる内陸の民の総称。様々な部族があり、独特の文化形態を持つ。また、殆どの民が魔術を使うことができる。クレスト4力国にとって最大の脅威であり、その為特に教国ラウンデルでは彼らを『邪神インドラの使者』として忌避する傾向がある。

殆どの部族がアッシュラムス教を信仰している。昔はクレスト教を信仰する部族もあったらしい。

## 宗教

### 宗教

#### \* クレスト教

正義の女神ミシユラと邪神インドラの対決を説く。ひとは神の下に平等。具像崇拜は禁止だが、女神の象徴である兜飾りと水クレストを神聖視する。魔術の才の無い人の多い帝国、教国、共和国、王国で広く信仰

#### ・ 宗派

##### 祖 クレスト教

ひとは全て平等の為、女神の寵愛を受けることができる者はいないと考える。魔術を否定。王国に多い。共和国にも一部分布

##### ランバント 獅子派

魔帝こそが女神の寵愛を受けていると考える。魔術容認。帝国に多

いが、共和国にも一部分布

##### アイリス 百合派

聖女こそが女神の寵愛を受けていると考える。魔術容認。教国に多い。共和国にも一部分布

##### アン 邪神派

女神と邪神を同一と見なす。2000年程前のラウンデル公会議にて、異端とされた。クレスト教には珍しく、魔術の才を持つ人々に広く信仰されていた。今でも共和国山間部で信仰されている。

#### \* アツシャムス（スーラ）教

太陽神シャムスを主とする多神教。魔術の才を持つ人の多い地の民が信仰。主な神は太陽神（最高神）シャムス、月の女神（慈悲の神）カマル、

地の神（戦の神）アンファール、  
水の女神（恵みの神）ナフル、  
夜の神（死の神）ライル。  
夜の神は忌み嫌われている

## 魔法／魔術・魔導

魔を扱う技は、大きく魔法、魔術、魔導の3つに分別される。

### 魔法

『せかいのあらゆるもの（＝魔）を統べる法』

大きく顕在魔法と概念魔法に分けられる。

顕在魔法とは、「セカイ」又は「世界」改変全般を指す。また、最初を除く「セカイ」の創造、破壊、再生、破滅もこれに当たる。「セカイ」又は「世界」の上位意思が使用する。

概念魔法には、「世界」又は「せかい」の創造、破壊、再生、破滅のみしかない。「せかい」を超越した高次概念体のみ使用可。

使用するに当たって魔力等を必要とはしないが、恒久的に顕在魔法であれば「世界」、概念魔法であれば「せかい」以上のものを理解している必要がある。

### 魔術、魔導

ひとが扱うもの。

クレスト教的に言うと、奇跡。曰く、女神からの祝福。これを受けることによって、女神の創造物を一時的に操る事ができる、とのこと。邪神由来の魔術、魔導も存在し、全て禁忌とされている。

アッシュラムス教的に言うと、神や精霊の加護。  
光、時間の属性を太陽神シャムスが、  
空間、癒しの属性を月の女神カマルが、  
火、地の属性を地の神アンファールが、  
水、緑の属性を水の女神ナフル司るとされている。  
また、死、闇の属性を夜の神ライルが司り、禁忌とされている。

#### \* 魔術

『世界のあらゆるものを操る術』

所謂属性魔法。正しくは分野魔術。術式や呪文と魔力を用いて、望む結果を得ようとする方法。結果が大切であり、魔力を持ち『解答』さえ理解すれば誰でも扱うことができる。必ず等価交換が成立する。但し、よくあるファンタジー設定の様に個人の分野が決まっているわけでは無く、殆どの魔術師が全分野を扱うことができる。差はあっても所詮、得意不得意程度。殆どの場合魔導と同一視される。

概念魔術：光、時間、空間、癒し

顕在魔術：火、地、水、緑

禁忌魔術：闇、死

概念魔術が得意であれば、優秀な魔術師とされる。効果の程は関係なし。

魔導（下記参照）と比べて効果は薄いが、確実性は高い。（得たい結果を『解答』として用意している為）

#### \* 魔導

『世界のあらゆるものを導く技』

術式や呪文と魔力を用いて、望む結果を得ようとする方法。但し、此方は過程を重要視する。例えば、魔力弾に方向性を持たせて発射したが、命中したかどうかは気にしない、など。此方は魔力を持ち、『問題』を見つけさえすれば誰でも扱うことができる。必ず等価交換が成立する為、殆どの場合魔術と同一視される。

イメージはよくありがちな魔力弾やらビームやら。当たるかどうかは二の次！

魔導にも分野が存在し、概念魔導が得意であれば、優秀な魔導士とされる。成功率は関係なし。

概念魔導：光、時間、空間、癒し

頭在魔導：火、地、水、緑

禁忌魔導：闇、死

魔術と比べて効果は大きいが、確実性がかくつと落ちる。因みに、魔力弾を魔術で再現するのは至難の技。（必ず「当たる」という『解答』を用意しなければならぬ為）

## 具体例

怪我を治療する場合

魔法：怪我したという事実を消すので、必ず怪我は全快する。

魔術：怪我が癒えるという『解答』を用意するので、確実に効果は出るが怪我が塞がる程度。

魔導：怪我をどう癒すかという『問題』があるので、その方向に力を使う。成功すれば全快、失敗すれば寧ろ怪我が酷くなる場合も。

魔力弾で誰かに攻撃する場合

魔法：最早その域を逸脱するため、比べ様がない。

魔術：相手に魔力弾が当たるという『解答』を用意するため、必ず魔力弾は命中するが、あまり効果を期待できない。牽制程度。

魔導：相手に魔力弾をどう当てるかという『問題』があるので、その方向に力を使う。魔導士にもよるが、命中すれば相当な破壊力を持つ。

魔力：人体で一から作ることは不可能なので、大気中の魔素を体内で精製して作る。但し、精製した魔力を貯めるには個人の魔力許容量に差があり、魔術や魔導が使える量の魔力を貯めることができる人間は稀。

魔力資質：体内で精製される魔力がどれだけ純粹であるかの基準。高ければ高いほど燃費が良い。

## 紅の死神（前書き）

あらずじと文体が違うのは気にしちゃいけない。



## 紅の死神

「骨」が無いねえ、アツサリ死んじやうなんてさ、全く」

不満気にそう呟いて、彼はたった一箇所、頬に付いた血を拭う。

此処は戦の跡。大地には、死体が累々と転がっている。首のないもの、腹を裂かれたもの、拳銃の果てには五体がひとつも残っていないものまで。

其の濃い死臭に、彼は口許を弓なりに歪める。そして、思い出したかの様に大剣を振り、其れにべつとりと付いた血糊を落とした。其の間、彼の表情が動くことは無い。口許は三日月を描いたまま。何故なら、此の地に転がる死体は全て、彼が切り裂いたものなのだから。

地面は鮮血の赫に染まり、其処に夕暮れの紅が差し込んでいる。返り血一つない彼の黒い甲冑は、夕日に照らされて紅く輝いていた。

そんな赤の大地にぽつんと佇む彼。其の漆黒の髪は、血や汗で固まることなく微風にさらさらと揺れ。血よりも赫い瞳は、夕陽よりも強い光で地平を見据え。そして何よりも、毒々しく絡みつく様に描かれた両頬の赫い紋章が、彼が常人<sup>ひと</sup>離れしている様な雰囲気<sup>ふんいき</sup>を醸し出している。

其れも其の筈、何故なら彼はひとであって、人ではないのだから。

「嗚呼、また、死の匂いがする

彼は片眉を吊り上げる。山の向こうを見つめる其の瞳に、少しばかり狂気の色が差す。

男共の汗臭い匂いに混じって、女子供の匂いが少し。そして。

「面白くなりそうだ

彼は黄昏に飛び立つ。噓せ返る程濃い血の香のなかに、微かに混じる、封じられた絶大なる魔力の気配。

「<sup>カイザー</sup>次期魔帝様”とは、どんなツワモノなのでしょうかね

嗚呼もう、笑みが零れて止まらない。彼はクツクツ、と笑って、其の手をさっと翻した。途端、足元に緻密な魔法陣が現れる。彼の身体が雫の様に、世界に溶けてゆく。

「向かうは戦場、我、死と放浪の化身也」

そう言い残し消えてゆく彼に、名前などは無い。紅<sup>ギョールズ</sup>の死神。人々はそう呼んで畏れるのみ。

彼の居なくなつた大地は、もうすでに一面の赤を覆い隠す程にまでとつぷりと闇で覆われていた。

## 紅の死神（後書き）

用語の元ネタとかそんなの

カイザー：ドイツ語で皇帝

ギュールズ：古フランス語で赤

ああ、まんまだよ

灰の帝国（前書き）

またもや短いorz

## 灰の帝国

その知らせは、飛脚よりも早く国中を駆け巡った。

如何せん話題の少ない時代ではあったが、それでも此の話が王都シエブロンからたったの2日足らずで辺境の村々迄届いたのだから、人々のネットワーク程恐ろしいものは無いのかも知れ無い。何処も彼処も其の噂で持ち切り、国の民であろうが無かるうが、人々は嬉々として此の話を事あるごとに持ち出した。

次の魔帝様は余程強いのか、余程愚かなのか、と。

何故ならば、新たな次期魔帝はその盾となる者を1人しか選ばなかったのだ。これは帝国始まっての異例の事態である。

代々帝国は、魔帝と王の盾という近衛兵と閣僚から成る組織によって支配されてきた。王の盾に入るには、政治、近衛、何れにしても三部会と魔帝の信任が必要に成る。その為、何れ程野心家であっても、国の中枢を握るのはなかなか難しい話であった。

そんな政治体制を、史上主義を貫く貴族たちが良く思う訳が無い。

その為、魔帝は常に誰かから命を狙われている、と言っても過言では無いのだ。先帝公の時分など、一日に5、6度は刺客がやってきた程なのだから。

そんな訳で、どれだけ力の強い魔帝でも、近衛騎士を必ず何人かはつけていたという。国の記録にもはっきりと書かれているので、間

違いは無い。第3代は50人、第12代は32人という様に。

然し、今回は些か事情が異なる。前述の通り、新たな次期魔帝は近衛を1人しか取らなかつたのだ。しかもまあ、その1人というのも？身でひよろりとした、何とも頼り無さそうな男なのである。為政者の顔も知らぬのに、高が一介の近衛兵の風貌ばかりが有名になるのは何とも不思議な事ではあるのだが。

こんな男に、魔帝の盾など勤まる筈が無い。

世間一般の目は何処ぞの貴族やらのそれよりも、此の異例の事態を的確に見据えていた。

筈だった。

## 灰の帝国（後書き）

用語の元ネタとかそんなもの

エスカッション：紋章学において、オーディナリー盾の意  
シェブロン：紋章学において、盾の模様オーディナリーの一種

はい、まんまです

## 蒼の魔女（前書き）

未だに話の本筋はおろか、章の時系列すらつながっていません…ど  
ーすんだ 汗



## 蒼の魔女

「はあ、」

広間の隅の窓にもたれ掛かって、彼女は今日幾度目かの溜息を吐いた。

外には雲ひとつ無い真つ青な空が広がっていた。川の向こうの市からは、わいわい、がやがや、と品物を売り買いする威勢の良い声がこちら迄響いてくる。

「どうしたら良いのかしら？」

次期魔帝の信任の儀を前にして、彼女の表情は緊張に歪む。彼の策に乗ったは良いが、此れでは余りにも不安なのだ。何故ならば、周りに何人かは居て良い筈の近衛が誰一人いないのだから。

私の計画が台無しじゃないの。

彼女はむう、と唸りながら、今朝のやりとりを思い浮かべる。近衛を彼しかつけないことはずっと前から了承済みではあった。然し、其の彼が自分の側に待るつもりが無いというのは、今朝初めて知ったことなのである。

「警備が手薄だと思わせておけば、反乱分子も油断するでしょう？ 貴方が幾ら強かろうともね」

そこを、懲らしめてやるんですよ。

そう屈託の無い笑みを浮かべる彼の、アイスピックよりも鋭利な眼光に、彼女は冷水を頭から被るよりずっと酷くひやりとした。

「大体、未だ魔力覚醒していない貴女程、狙い易い者は居ないでしょうし。」

其れが心配なのよ、と言ってみたりはするものの、一向に相手にされる気配もなく。誰に向かって注文つけてるのかしらね、と軽く拗ねてみた処で、返事は何度言ったって同じ。

「心配などなさらずに。其れとも私に何か、不満があたりで」

黒い髪に、黒い目。その深い黒の底には刺す様に冷たい赫が見える。彼女は其処に何故か恐怖を覚える。彼はひとであって、人でないのだ。それが、彼女の寿命<sup>パートナ</sup>。それを、彼女は誰よりも良く知っていると言っのに。

「はあ、」

彼女はまた溜息を吐く。

とは言っても、総ては予想の内。先頃からの溜息や浮かない顔は、”何処にいるのか判らない”、見えない監視者達の目を欺く為。彼女は全てを理解しているのだ。何処に敵の目があるのかも、彼が自身を護る為に、沢山の代わり身を側に置いている事も。

だから、こつやって一番魔法<sup>ひと</sup>の目につきやすい窓際で、不安に押し

潰されそうなか弱き乙女を演じているのだ。

帝家の証である、流れる様な黄金<sup>きん</sup>の髪が、ふうわりと風に靡く。海よりももっと深い蒼を湛える双眸は、不安げに下界を見下ろし。そして。左頬の絡み付く様に描かれた、血よりも濃い赫の紋章が、毒々しく其の色彩を放っていた。

其の全てが、彼女を常人<sup>ひと</sup>離れしている様に見せている。其れも其の筈、彼女はもう人を”やめて”しまったのだから。

彼女の名は、次期魔帝<sup>カイザー</sup>、フェデリカ。忌まわしき二つ名は、蒼<sup>アジユ</sup>の魔女<sup>メル</sup>。

## 蒼の魔女（後書き）

次回、細かい世界設定を投稿する予定です

## 黒の重線（前書き）

やっとここに、黒幕の登場です

## 黒の重線

冷たい大理石の宮殿に、荘厳な声が響く。かつん、かつん、と足音を立て、新たに王の盾となった者達は魔帝の台座の前に跪いた。

信任の儀は先に国中に知らされた通りに、何の滞りも無く進められてゆく。

順番が回って来たのだろう。拝礼を促す声に合わせる様にして、新しく魔帝の狗となるべき彼は、若干19歳、未だ少女の域を抜け切らない次期魔帝の前に頭を垂れた。

「王の盾が隊長、サルヴァトーレ。此の名に掛け、御前は其の身を以って魔帝を護り徹す事を誓うか」

前任の宰相が凜とした声で決まり文句を述べる。

彼はええ、と呟き目を細めた。

「但し、友誼と干渉を以って」

アレが、近衛騎士だと？

その最中、マクシミリアン・トレッシャーはその様子を粒さに眺め乍ら内心苦笑した。

あれでは殺してください、と言っている様なものだろうが。

今回新たに近衛に命ぜられたのは、黒髪、黒眼のひよろりとした何とも頼り無さそうな男。長めに伸ばされた髪から覗く其の顔は、男にしておくには勿体無い程、美しい。

いつそのこと、あの愚直なシャル”様”の男娼にでもしてやりたい位だ。

と彼は無表情な仮面の下で、意地汚い笑みを浮かべた。

己の望みなど、すぐにでも叶えられよう。何せ、此方の手の物はざつと200。対する彼方は1。しかもまあ、あんなに女々しい体付きである。勝負は見えたも同然。

これから出世街道まっしぐらだと言つのに、直ぐにそれを潰されてしまつだなんて。

憐れだねえ。

彼は内心ほくそ笑んだ。

さて、先ずは盾を、一体どうして遣りましようかね

所変わって、トレッシャー邸、マクシミリアンの書斎にて。彼は羊皮紙の前に腕組みをしていた。

詳しくは知ら無いが、書類に拠ると、新たな近衛は四六時中魔帝の側に侍ることを嫌がったらしい。つまり、魔帝は隙だらけ、寧ろ可哀想な程誰にも守ってもらえないのである。

「何ともまあ、愚かな」

刺客は私以外にも山程居るというのに。敵とは言え、盾も持たずに戦場に立たされる運命と相成った、か弱い乙女に、彼は少なからずの同情の念を抱いた。

「そこで、だ」

マクシミリアンはふと浮かんだ”名案”に口許を歪ませる。あの莫迦な近衛を先に始末してしまえば良いのだ。

あの可憐な乙女は、近衛の身勝手な振る舞いにさぞ不安を抱えているに違いない。

だから、と彼は暫し中空を眺める。

私兵の幾つかに近衛と魔帝を襲わせ、残りで魔帝を守らせれば良い。

彼は魔帝の貌と近衛の貌を交互に思い浮かべた。

とんだ茶番だ。然し、効果は絶大なものに違いない。



何せ、魔帝様は殆ど無条件で自分を取り立てて下さるだろうから。

弟君など知ったことではない。自分さえ権力を握ることが出来さえすれば良いのだ。

「おっと、」

いけませんねえ、と彼はニンマリと嗤う。

まだ今のところ、私はシャル様の”味方”なんですから。

## 黒の重線（後書き）

次話かそのあたりからだんだん時系列の交差が始まります。

うお、意味不明で危険だわ、ってことなので、

苦手な方は戻るボタンもしくは×印連打をよろしくお願いします。

## 金の傀儡（前書き）

時間交差、始まります  
危険です。特に作者が。

## 金の傀儡

「と、言う訳です。でね…」

信任の儀の次の午後。日の当たるテラスの一角でマクシミリアン・トレッシャーがぺらぺらと饒舌に語るのを、彼は殆ど聞き流していた。

よくもまあ、話のネタが尽きないもので。

おべっかばかり聞いていて一体何が楽しいのか、と顔に薄い笑みを貼りつけたまま、彼は内心苦笑する。

一方のマクシミリアンは、貴方様を魔帝に立て私達の天下を取りましょう、と意気洋々と腕を捲し上げて見せる。彼はそうですね、と嬉しそくに、然し内心では詰まらなさそうにそう頷いた。

別段、自身が魔帝になるつもりなど毛頭無いのだ。大体、姉の方が自分より魔力も、度量も優っているのである。自分が魔帝になる意味が一体どこにあるのか。どうせ何処か（目の前）の野心家の操人形にされてしまうがオチだというのに。

それならば、と思ったのはもう随分と前のこと。

「姉様、貴女の即位に支障が無い様に、私は敢えて阿呆共の傀儡となり、貴女に降りかかる火の粉をなるべく先に振り払っておきましょう」

「私が姉様の盾となります

遠い、遠い、何時かの盟約。自分より遙かに聡い姉は、ただ何も言わず哀愁に満ちた蒼を俺に向けていた。

嗚呼、と心の中で溜息を吐く。トレッシャーの阿呆狸は未だに喋り続けている。貴方が即位すればこの国は安泰だ、とか嘘八百。

見え透いた野望を隠すつもりなど無いのだろうか。彼の言の端からは、権力欲がありありと滲み出ている。とは言った処で、自分とは余り関係が在る訳では無いのだが。

恐らく彼は知らないのだろう、いや、姉以外には教えてすらないのだから当たり前だろうが…帝家に伝わる、異能の伝説、己は其れの体現者であるという事を。

御前の想ひは言の端の色味となりて、彼の者へと伝わる。嘘は吐く可ず。戯言は言ふ可ず。

帝国第一皇子、シャル・サルタイアの目には、黒い嘘に塗れたマクシミリアンの姿がしかと映っていた。

「ほう、奴は御前を立て、次期魔帝の命を狙うとな」

肯定の意を込め、金髪の彼はコクン、と頷いた。途端、男の口許が

吊り上がる。

「大方真っ先に私が狙われるだろう。致し方あるまい。折角だ、死んだ振りでもして彼方を油断させてみようか」

意地の悪い笑みを浮かべ乍ら、近衛隊長は今後の予定を紡ぎ出す。喰えない男だ、とシャルルは大っぴらに苦笑した。彼と腹の探り合いをしたところで大した収穫など得られはしないだろう。彼の言の端からは何の意図も感じられないのだから。

「然し、奴も行動が早い」

「仕方ありませんよ。姉…フェデリカ様の両脇は今、がら空きなんですから」

知らない人が見れば、ね、とシャルルはくすくすと笑う。次期魔帝の周りには何時何時でも彼の代わり身が姿を隠して侍っているのだが、強力な認識障害が掛けてあるので其れに気付ける者など殆ど居ないのだ。

「まあ…そうかねえ」

とサルヴァトーレはぼりぼりと頭を掻き乍らばやく。その目はシャルルの背中よりも遙か遠くを見つめていた。

「君はもう少し奴の策に踊らされておいてほしい」

と、彼はシャルルに視線を戻す。

「奴の事だ。二重三重に策を練っている可能性も否定出来まい」

判りました、とシャルルは彼に頭を下げ、それでは、と廊下の、彼とは別の方向へと歩き出す。擦れ違いざまに彼はシャルルに一言、気を付けておけ、と囁いた。

トレスシャー  
「あの狸、頭だけは悪くはない」

そう独り言つサルヴァトーレの横顔は、誰もがぞつとする程嬉々としていたという。

## 金の傀儡（後書き）

神様の名前が（今更）決まったんで、  
世界設定？が更新してあります。

W i k i p e d i a ありがとー！



## 銀の栗鼠

「ハインリヒ、来て頂戴」

勝気な幼馴染、と言つべきだろうか、部屋の中から彼女の呼ぶ声が聞こえてくる。

「はい、」

従順にそう返事しつつも、自分は執事でも使用人でも無いのに、と内心彼、ハインリヒ「レオポルド・ヴェアは苦笑した。この関係はもしかしたらもう変わることはないかもしれないと思い乍ら。

「まあ、其れで構わないと言えは嘘になるけれど」

と彼は誰にも聞こえない声で独り言つ。矢張り、年下の彼女からの僕扱い程、自尊心に傷が付き易いものは無いのかもしれない。彼女から気に入られているという点では申し分無いといえは無いのだが。そうでなければ、大公と言えど高が”良家の”次男坊が宰相などという高位な役職に付ける筈が無い。

彼は少し憂鬱な気分で、部屋の主に声を掛けた。

「どうされましたか、次期魔帝様」  
フェデリカ

それで、と其の黒い影は執事業務から解放されたばかりのハインリヒの前に立ち塞がった。

「何か疑念でも」

次期魔帝の側に待る訳でもないのにずっと魔帝の執務室の片隅に座っていた彼を、ハインリヒは時折ちらと見遣っていたのだから、彼が不信任を得てしまうのに何ら疑問はない。寧ろ、私について、とは一言も発しない処を見ると、彼が余程喰えない奴である事に間違いは無いだろうし、此方はそれに気をつけなければならぬ。本名も出身も全てが謎なこの男。ハインリヒに取って、仮にも上官に当る彼程よく判らない人物は居ない。

「いいえ、全くそんな」

暫く沈黙が続く。言葉を用いない腹の探り合い。ハインリヒは後悔した。迂闊に彼を調べさえしなければ、と。彼はもう此の事を識っているのだろう。何故ならば、魔帝の狗、王の盾が隊長、サルヴァトーレに真名すら存在しないのを疑問に思わない者など、恐らく誰一人としていないだろうから。

いや、彼女は例外だったか

矢張り何時もの勝気な幼馴染の様を想像してしまう。彼、ハインリヒは内心苦笑した。良い歳になったというのに、未だに甘い幻想に浸るだなんて。

いや、今はそんな事を考えている場合では無い。彼については、幾

ら調べても此の手は虚空を掴む許り。彼女とは何時かの戦場で出逢ったというが、其れすらも真実か否かは本人以外に知る由も無い。

ほう、と黒<sup>サルヴァトーレ</sup>尽くめの男はさも可笑しいとでも言うかの様にその黒い目をすっ、と細めた。

「此の案件については、」

とサルヴァトーレが沈黙を破る。但し、何やらおぞましい雰囲気を纏って。

「此以上首を突っ込まないでくれ給え」

冷汗が頬を伝う嫌な感覚を無視して、ハインリヒは言葉を絞り出した。

「…何故で、しょうか」

彼は一瞬驚いた顔をして、どういう訳か、識ってしまえば、と言葉を発したにも拘らず其れを一旦止めて首を振った。

「もう元には戻れなくなる、とだけ言っておこうか」

何も返せないハインリヒに、あと一つ、と彼は付け加える。

「シャル・サルタイアー第一皇子殿下の振る舞いについては、私が保証しよう。踊らされているふりをする人形師を観るのは、実に小気味良いのでね」

さらばだ、と颯爽と廊下を歩く黒い背中に、ハインリヒは何も声を

掛けられなかった。

## 銀の栗鼠（後書き）

ヴェア<sup>グ</sup>リス

つまり、銀の栗鼠<sup>グ</sup>＝銀の身分<sup>アージェント</sup>、ヴェア<sup>グ</sup>家の人物

## 黒の甘言（前書き）

最強要素がコレっぽっちも出て来てません。

強いてゆーならシャルル君の能力が微チート。

予定では、フェデリカ最強、トトーがテラチートにたぶんなる。

## 黒の甘言

うわあ、こりやまた凄い

黒い靄がぶわっと、という表現では収まり切らない程噴出するのを、彼は内心呆れ乍ら、然し眉ひとつすらぴくりとも動かさずに眺めていた。

其の出元は勿論目の前の男、マクシミリアン・トレッシャー。此の間の計画が纏まったのだろうか、彼はシャルルの前で嬉々として喋る、喋る。其れはもう、日頃のおべっかから、聞きたくもない彼の野望まで実に沢山。

然し、其れは全て本心では無いことばかり。そうでなければ、言の端から黒い靄、嘘の証拠など溢れ出る訳が無いのだ。

はあ、

と矢張り無表情の仮面の下、彼は溜息を吐いた。目の前の狸に其の思惑を隠すつもりは一切無いらしい。まあ、却って都合が良いと言えはそう為るのだろうか。

シャルルは其れを好機に、となんとなく目を細め、黒い靄を『読む』。靄を、言の端を手繰り寄せる様に、慎重に、且つ大胆に其れを読み解いて行く。

成る程、ね。

つい先程擦れ違った男が、彼の頭の中でニタリと嗤った。

トレッシャーの狸、確かに頭だけは悪くはない。

全て狗の言う通り。狸は二重三重の策をもう既に用意している様だ。

さて、貴方達は一体どんな舞を見せてくれるのでしょうか。

彼もまた、心の中でにやりと嗤った。

彼、マクシミリアンは目の前でうつとりと目を細める第一皇子を見遣り、何かの手応えを感じていた。彼は其れが虚無であることもつゆ知らず、自らの計略の素晴しさについて2、3度考えを巡らせる。

素晴らしいじゃないか。

誰も傷付かないのである。理論上ではあるのだが。

とは言っても、

と彼は内心ほくそ笑む。

貴方には犠牲になっていただきますけどね。  
シャル様

致し方の無いことよ、と彼は其の辺りを割り切って考える。此処2、3年、魔帝に関する意味深長な発言の多い言わば第二席を、誰が弁護出来るというのだろうか。



いや、誰も出来るまい。

彼は心の中でクツクと嗤い、もう一度目の前の皇子を見遣る。相も変わらずのほほんとした空気を醸し出す彼に、マクシミリアンは何故か安堵の表情を浮かべた。

「マクシミリアン・トレツシャー殿に直々申し上げたい」

第一皇子との面会の後、丁度屋敷に着いた途端のことだった。王の盾の使者が伝令にやってきたのである。そんな果たし状の様な文言を当の本人、マクシミリアン・トレツシャーは訝しみ乍らも何故か満更でもない、と言う様な感覚で受け取った。差出人は魔帝の狗、サルヴァトーレ。何があつたのかは皆目検討もつかないが、まあ良いだろう。どうせ計画がバレなければ問題はない。

寧ろ、”どの様に攻め入るか”の判断をするのに丁度良いかもしれない。

と彼は従者の小言に適当に相槌を打ち乍ら考える。未だ庭の手入れが終わっていないらしい。新しい狗はもつと前もって訪問を申し出られないのだろうか。そんなことについて云々。

「まあ気にするでないさ。そのうち彼には死んでもらうのだからね」  
物騒なことを隠さず大っぴらに宣言できるのが、己の屋敷の素晴らしいところかもしれない。

蓋を開けてみれば、それはただの世間話が殆どだったと言っても過言では無いだろう。結局のところ、サルヴァトーレとマクシミリアン・トレッシャーの会談はこれに尽きる。

今日の天気の話から始まって、最近各々の侍女長の小言が五月蠅いのだ云々。

始めから堅苦しい話をするのだと気構えていたマクシミリアンはひどく拍子抜けしたものである。

然し、それを表に出すのは少しかりが引ける。というのも、話題が話題の所為か、相対する男の態度はあくまでも自然体、そして自然体であるが故に隙が無いのだ。

他に、プライドのことも少しある。侯爵2家のうち、トレッシャー家は代々交渉等の弁論関係の分野を司っている。どこの馬の骨とも知らない男に口で負ける訳にはいかないのだ。

（目の前の男の分析は侍らせている部下と監視魔術に任せるとして……）

マクシミリアンは男の話に適当に相槌を打ちながら、思考の海に潜る。この男は何の為に自分を訪ねてきただろう。この男は何を伝えたくて此処に居るのだろうか。判らない。情報が足りない。これでは判断のしようがない。結局、幾ら考えても答えは出なかった。

「さて、本題へ移らせてもらおうか」

開始早々の天気の話からずっと弛緩していた場の空気に、いきなり緊張が走った。

原因は無論黒の男である。  
サルヴァトーレ

その渦中の彼は度肝を抜かれたマクシミリアンの目の前で何とも黒い笑みを浮かべていた。殺気を含ませた彼の冷たい声に、マクシミリアンの全身からは冷や汗が吹き出す。実に気持ちが悪い。

然し、そんなことを気に掛けられる程の余裕は今のマクシミリアンにはなかった。

「近衛が1人だけ、という意味を是非とも再考して頂きたい」

何も、返事出来るような空気ではない。

無礼な客人は、品定めでもするかのようにマクシミリアンを眺めている。一挙手一足、引いては発する言葉全て逃さぬ様に。

客人は暫くそうしていたかと思えば、次には目の前に差し出された茶を啜っている。しかも、してやったり、という顔で。

「そろそろお暇させて頂こうか」

最後の数分間で得られた情報は、果てしなく重い。

颯爽と屋敷から出てゆく狗の後姿を眺めていた彼が、終始相手のペーイスに吞まれていたことに気付くのにそこまで時間は掛からなかった。



## 黒の甘言（後書き）

（お知らせ2行と作者の妄言）

次回、ネタバレ必須のキャラ説。

見たく無い人は見ない。コレ常識。

アレだったら fate 風ステータス表書きちやろーか。

…ダミだ。

何か天罰が下りそうだし。『エヌマ・エリシュ』レヴェルの。

ま、『無限の剣製』だったら自分から当たりに行くがな？（危険）

ワタクシ、英霊エミヤは無駄に好きです。一家に一台（？）は欲しい。

## 紅の思惑（前書き）

黒の重線から黒の甘言までの裏サイドです。

## 紅の思惑

「サルヴァトーレ殿、例の彼について少し…」

信任の儀の次の夕方。サルヴァトーレは金髪の皇子、シャルル・サルタイアーに半ば呼び止められるような形で話しかけられた。

機密事項ですけど、と彼が小声で話そうとすると、サルヴァトーレは機転を利かせて周囲に人除けの魔法を使用する。ありがとうございます、とシャルルは申し訳なさそうに苦笑した。

「それで何か進展はあったのかい」

ええ、とシャルルは頷くと、テラスでの一件を話した。

……

「ほう、奴は御前を立て、次期魔帝の命を狙うとな」

粗方話し終えた金髪の皇子がコクン、と頷いたのを見て、サルヴァトーレはやはり、と口元を吊り上げた。

「大方真つ先に私が狙われるだろう。致し方あるまい」

寧ろ、”狙わされている”という方が正しいかもしれない。そんなことは御首にも出すつもりはないが、どうせ妙に勘のいい皇子のこと

だ、『読め』はできなくとも理解はしているだろう。大体、秘匿されるべき異能は秘匿されているからこそ厄介なのであって、それがどんなものであるかさえ判ればレジストなど簡単に出来るものなのだ。故に、シャルルがサルヴァトーレの言の端を『読む』ことは出来ない。

「折角だ、死んだ振りでもして彼方を油断させてみようか」

意地の悪い笑みを浮かべ乍ら、サルヴァトーレは今後の予定を紡ぎ出す。彼に異能の力は効かない。それを踏まえた上でか、シャルルは大っぴらに苦笑した。

「然し、奴も行動が早い」

「仕方ありませんよ。姉：フェデリカ様の両脇は今、がら空きなんですから」

反逆者には真に残念なことに、サルヴァトーレは常時5匹見えない人形を侍らせている。

「知らない人が見れば、ね」

シャルルはそれを知っているので様見ろ、とでも言うかの様にくすくすと笑う。

「まあ…そうかねえ」

とサルヴァトーレはぼりぼりと頭を掻き乍らばやいた。然し、頭の中ではもう次の構想へ考えを巡らせている。視線は宰相の執務室へ。



「君はもう少し奴の策に踊らされておいてほしい。奴の事だ。二重三重に策を練っている可能性も否定出来まい」

シャルは自身へと視線を戻した彼に、判りました、と頭を下げ、それでは、と廊下の、彼とは別の方向へと歩き出す。

「気を付けておけ。あの狸、頭だけは悪くはない」

サルヴァトーレは擦れ違い様にそう呟いた。

人間は…面白い。

それからしばらくの間彼が近寄り難い程壮絶な笑みを浮かべていたのは、本人の与り知らぬことであつたりする。

「ハインリヒ、来て頂戴」

それから幾許の日が経ったその日。何をするでもなく執務室の窓際に座っていたサルヴァトーレの後方で、主が彼女の幼馴染を呼ぶ声がした。

（何時も思うが…何故性格を偽る？）

本来の彼女の気性は勝気でも何でもなく、年相応に臆病で、優しい。寧ろそちらの方が相手に全てを悟られずに済むのではないか。そんなことを考えながら、彼はちらりと呼ばれた男を見遣る。どうも彼

方も此方が気になっているらしい。というのも、目こそ合いはしないが彼の視線が偶に此方に向くのが明らかに感じるのだ。

（まあ…いいさ）

人間の考えることがいまいち掴み辛いのは今に始まったことではないので、サルヴァトーレはそれ以上深く考えることを諦めた。気にはなるのだが。

（”彼女”と最後に話したのは何時の事だったか…）

後方で交わされる会話を聞き流しながら、彼は今は存在が臃げになっている想い人に思いを馳せる。

（まあ、そのうち…ね）

アレが思い出すのも時間の問題。いや、永久の生に比べれば些細なこともかもしれない。

（”彼女”の核…）

やっと見つけたのだ。もう手放したくはない。

………

「一体何か疑念でも」

結局のところ、ハインリヒからの視線が気になって仕方が無かった

のだ。腹いせにとはまた違うが、敢えて、私について、とは言つつもりはない。

「いいえ、全くそんな」

一寸青くなつた相手を見て、サルヴァトーレはいい気味だとばかりに目を細めた。

「ほう。」

面白い。どうせ己の正体について考えあぐねているに違いないのだが。

「此の案件については、此以上首を突つ込まないでくれ給え」

殺気、覇気その他色々な思惑を乗せて、サルヴァトーレは牽制する。

「…何故で、しょうか」

これに折れない輩というのも珍しい。サルヴァトーレは驚きの意を込めて眉を少し上げた。

「識つてしまえば、もう元には戻れなくなる、とだけ言っておこうか」

勇氣（蛮勇の方が正しいかもしれない）があると言え、一般人がこれ以上識る必要は無い。もし一線を超えてしまえば自我が崩壊しかねない。

「……………」

何も言わなくなった相手に、彼は思い出したかの様にあと一つ、と付け加える。

「シャル・サルタイアー第一皇子殿下の振る舞いについては、私が保証しよう。踊らされているふりをする人形師を観るのは、実に小気味良いのでね」

「マクシミリアン・トレツシャー殿に直々申し上げたい」

ハインリヒとのやりとりを終え、自身の執務室で下らない文言を羊皮紙にしたためながら、サルヴァトーレはマクシミリアンが慌てふためく様子を想像して黒い笑みを零した。

（折角態々獲物が出向いて下さるんだ…狸は一体どうするのかねえ。俺を試すか？それとも…）

サルヴァトーレの目が紅く光る。

（俺を、殺すか？）

結論から言つならば、マクシミリアンとの会談はサルヴァトーレにとって拍子抜けする様なものだった。

今日の天気の話から始まって、最近侍女長の小言が五月蠅いだの云々。敢えてどうでもいい話題ばかりを並べ立てて時間を稼いでいたのだが、その間マクシミリアンが表立った動きをすることはなかったのだ。

「さて、本題へ移らせてもらおうか」

下らない話を2時間も3時間もしていれば気が長い方であるサルヴァトーレでさえも流石に苛々としてくる。サルヴァトーレは頃合いを見計って、開始早々の天気の話からずっと弛緩していた場の空気を一瞬で塗り替えた。

「……………」

一瞬の沈黙の後、マクシミリアンは度肝を抜かれた顔でサルヴァトーレを覗き込んだ。何も考えていなかったのか、此奴は。サルヴァトーレは思わず嘲りの意味を込め、苦笑いでマクシミリアンを見遣った。彼方は冷汗モノだろうよ。何故なら、苛々も相まつたさっきの声は果てし無く冷酷で、冷淡で、無慈悲に響いたから。

「近衛が1人だけ、という意味を是非とも再考して頂きたい」

「……………」

やはりマクシミリアンは何も言わない。いや、何も言えないのか。兎に角、焦っている人間の行動とは実に面白いものだ。一通り相手

を眺め終わったサルヴァトーレは、冷え切った茶を飲み干した。別に男色趣味がある訳でも何でもないが、面白かった、という意味ではこの光景、立派な野郎が慌てふためく様子は相当眼福なものであるに違いない。

「そろそろお暇させて頂こうか」

だからと言って、じろじろ眺めていたって仕方あるまい。間抜けな様を晒したマクシミリアンから目を逸らし、サルヴァトーレは城に帰ることにした。

## 紅の思惑（後書き）

実はサルヴァトーレ、何にも考えてなかった、っていう。

## 蒼の追憶（前書き）

友人から、「イマイチ意味が分からない」と酷評を受けてしまった…  
ま、意味が分かられても困るっちゃあ困るんだけど。



## 蒼の追憶

夕刻の鐘が鳴る。フェデリカ・フォン・サルタイアーは緊張に顔を強張らせ乍らベッドの中に潜り込んだ。今宵、帝家の封印が解かれ、晴れて彼女の身体は自由となるのだ。記憶という名の重い枷と共に。

（今晚の夢は…あの日の、ことで…）

サルヴァトーレは既に今夜、5年前の邂逅の記憶についての夢を見ることをフェデリカに暗に説明している。彼女は近衛に言い含められた言葉を頭の中で反芻した。

フェデリカには、5年程前からずっと使えさせている筈のサルヴァトーレについて、どうして出会ったのか、彼は一体何者なのか、という記憶が完全に欠落しているのだ。数少ない覚えていることと言えば、彼が彼女を賊から救ったことと、彼女が彼にサルヴァトーレという名を与えたこと位しかない。

故に、彼女は恐ろしかった。普段は何か本能的なところでサルヴァトーレを信用しているのだが、それが何故なのか理由が分からない。今迄はそういうもの、といって放っておいてもサルヴァトーレの仕事ぶりからして何ら問題はなかったのだが、”何か”を知ってしまったからならどうだろうか。分からない。分からない故に恐ろしい。

幾ら彼女が一国の王だからといって、己の知らない過去を覗くのに何の躊躇いもない訳がない。ベッドの天蓋の端をじっと見つめる彼女の横顔は、年相応の不安の色が有り有りと見てとれた。

（知らない訳には… いかない）

彼女は意を決して目を瞑る。何時の間にか、毛布から覗く均整の取れたその顔は19の少女とも大人とも言えぬ女性のもではなく、れっきとした一国の主のものに変わっていた。

夜闇に、紅い光が輝く。彼女はただその光景に戦慄した。

町が、燃えているのだから。

どうしてこうなってしまったのかは判らないが、ただひとつ、判ることがある。

それは、此処が戦場であること。

辺りには、焦臭い匂いに混じって、血の匂い、肉の焼ける匂い等の戦独特の匂いが漂う。戦士達の雄叫びに気圧されるかの様に、彼方此方で女子供達の悲鳴が聞こえる。

彼女はそのまま其処に立ち尽くしていた。

風に靡く黄金の髪。其れは何処へ行っても目立つもの。案の定、彼女は何処ぞの者とは知れぬ、屈強そうな男共に囲まれていた。

「親分どうしますぜ。」

こそそと、醜惡な笑みを浮かべ話す男共。褒賞金が出るとかどうと聞こえるから、彼等は大方あの野心家の差し金に違いない。

ジークムント・トレツシャー。野心を其のまま描いた様な貌の、少し”何か”が足り無い侯爵公。

嗚呼もう少し、気付くのが早かったなら。

もう何処にも立たない後悔ばかりが頭を過る。もう私は終わるのだ。国がどうなろうと知ったことでは無い。

男共の中の1人が、彼女を押えつける。もう1人の男が、ちゃきりと銀に光るそれを腰元から引つ張り出した。

首に刃物が当たる冷たさを感じる。彼女はこれから先起こるであろう事を想像して、目をぎゅっと閉じた。

然し。

「いたいけな少女を手には掛けるだなんて、不道德極まりないねえ」

飛んだのは、間違いなく相手の首の方だった。相手に反撃の暇すら与えない剣筋は、男共を畏縮為せるのには充分過ぎた。彼女はただ目を見開いて、口を抑えるのみ。声など出ない。

其処には全て黒に身を包んだ…

死神が、いた。

「でしょう？次期魔帝、マドモアゼル フェデリカ。」

そう言って、彼は嗤う。その瞬間、周りの景色が一斉に爆ぜた。

あの後、何が起こったのか、今の私であっても掴み切ることとはできないまい。其れはもう既に理解の範疇を超えているのかもしれないのだから。

ヒトが、消えるだなんて。

部屋の中には、先程迄居た筈の男共の影が、布に落ちた染みの様に、ぽつんとあるだけであった。

彼女は声にならない悲鳴を張り上げ、地面に崩れ落ちる。死神は視界の隅で、冷めた目を此方へ向ける。其の口許が、ニヤリと歪む。

「さて、」

沈黙を破る声。彼女はふと我に帰る。部屋の中には、黒尽くめの男と自分のみ。先程迄居た男共は何処その床の影と消え。おまけに外の喧騒すら聞こえてはこない。

「貴方は」

彼女は成る可く低い声を出す。動揺を悟られぬ様、其れを手玉に取られぬ様。

「名乗る迄もない、ただの通り過ぎりさ」

彼はことも無げに答る。飄々と。ただ然し、其のぴつちりと閉ざされた奥を窺い知ることとは出来ない。

「嘘を吐くな」

彼女はぴしゃりと彼を一喝する。

「嘘は言っちゃいないさ」

本当の事を言ったって仕方無いでしょうけど、と彼は何となく苦笑する。

「御前は運命というものを信じるのかい」

またもやこの狭い空間を、暫し沈黙が支配する。其れを打ち破る様にして彼はこう切り出した。

「は」

何を、今更。彼女はそんな藪から蛇の様な質問に年相応の声で、年相応の反応を示した。然し、其れをすぐに無表情の下に引っ込める。彼女は心の中で頭を抱えた。嗚呼、何と浅はかな。ありのままの自分を、誰とも知れ無い者に曝け出してしまっただなんて。

「まあ良い。ひとつ、真実を教えてあげようか」

彼女が黙り込むのを見て、彼は溜息を吐く。彼女が己の言動を理解し切れていないのを見兼ねてか。

「今、此处で死ぬのと、どう為るのか一切判らない未来に背中を預けるのと、何方がお好みかい」

彼の言動に、薄らと殺気が募る。

「一体、どういう…」

「御前は元元、此处で殺される”運命”だったのさ」

思考回路が停止する。殺される？一体誰に？

「さっきの男共に良い様に弄ばれ、拳句の果てに、ね」

あり得無い程どす黒い笑みを浮かべ、彼は彼女を見下ろす。其の視線に、彼女は戦慄した。絶対的な力の差。紛れもなく其れはヒトを超えていて。

いいえ、と彼女は思い直す。彼は、きつと人では無いのだ。何故ならば、人ではあり得無い漆黒の髪、鮮赤の瞳、そして、両頬の紅い紋章。それらを全て、持ち合わせているのだから。

「そう。残念なことに俺は人では無い」

心が読めるのだろうか。彼は、ひとではあるがね、と鋭い眼光をつ、と少し緩めた。

「邪神、インドラ、か」

読心を司る存在は彼しかない。

「そうなるかも知れ無い」

でも、と彼は先程迄とはある種違った、ニヒルな笑みを浮かべた。

「少なくとも、自身、そんな陳腐な理解の範疇は超えているとは思  
うのだがね」

人のアタマで理解できる程、此の世は単純じゃあない、ということ。

「大体、俺にインドラとやらという名を付けられた記憶は無いね。  
其れ以前に、元々俺に名前など無いに等しい」

処で、だ、と彼は目を細め、此の期何度目か、ちらりと彼女を見遣  
る。

「時間稼ぎはもう済んだかね」

一瞬の、驚愕。全て見破られていたとは。彼女は瞠目した。然し、

「生きたいわ」

彼女は断言する。生存本能に従って。そう、と彼は嬉しそうに目を細めた。

「ならば、契約しろ。俺と。折角御前を気に入ったのだから」

「それは、どういった？」

邪神と関わっている時点で、もう元の生活には戻れまい。彼女は意を固める。

彼はそんな彼女を見て苦笑した。己はそんな存在であつたか、と。そして、彼は語り出す。

「率直に言おう。俺は御前の魂が欲しい。それだけさ」

それだけ、と言うには余りにも大きな要求。其れでは死んで仕舞うのでは、と困惑する彼女を他所に、彼は更に続ける。

「無論、御前が死ぬ必要は無い。大体、この取引で変わるのは死後の魂に箱庭の輪廻<sup>ルル</sup>が適用されるか否か。詰り、御前が御前として生きる間、この契約、何ら支障は無い。…まあ、20歳になるまでは私自身のこと以外は忘れていて貰うが。」

「…判った。私はどうすれば良いの」

「俺に名を付けるだけで良い。其れだけで、御前の魂は俺の所有物<sup>モノ</sup>になる」

そうすれば、御前は運命通り此処で”死んだ”ことになるのだから。



我ながら良い考えだ、と独り言ちる彼を他所に、彼女は暫し言葉を反芻する。

「魂は元元誰の物なのかしら」

先程から抱えていた疑問を、彼にぶつけてみる。口調は出来るだけ柔く、目当てのものを吸い出し易い様に。其れを見た彼は、ニヤリと笑う。

「調子、戻ったのか。まあ良い。此方の方が好都合だ」

其れで、と彼は息を深く吸い込む。

紳士たる者、質問には答えねばならないね、と。

「魂は、元元<sup>オレ</sup>世界のものさ」

けれども、と彼は意地悪な笑みを浮かべる。

「残念なことに、俺のものではない」

彼女は黙り込む。幾ら聡明であろうと、神の領域を瞬時に理解する者などそうは居るまい。よって。

「箱庭<sup>俺の一部</sup>のものであって、純粹な俺<sup>俺</sup>自身のものではないのさ」

と彼は苦笑した。これ以上の質問は赦さぬ、という雰囲気をもって。

「さて、お喋りは此の位にしよう。契約を忘れたのではあるまい」

ええ、と彼女は意に反して微笑む。頭の中はあやふやで理解し難いことで満たされている、筈なのに。

「サルヴァトーレ、よ」

彼女は朗らかに、そう答えた。其れを聞いた彼はさも可笑しそうな声で尋ねる。大方答えなどとうの昔に識っているのだろつというのに。

「して、理由は」

彼女はくす、と微笑んだ。

「誰も救わない」<sup>サルヴァトーレ</sup>救世主と”<sup>ひと</sup>他人の意のままの”<sup>フェデリカ</sup>善良な王”。面白  
い組み合わせだと思わない？」

日付が変わり、重苦しい鐘の音が辺りに響き渡る。帝家に伝わる戒めの封印は今、解かれた。同じ様に封印していた何時かの記憶と一緒に。

「20歳のお誕生日、おめでとうございます。フェデリカ・フォン・サルタイアー殿下」

巨大な魔力の奔流の中で、とある狗はそう呟いた。

## 蒼の追憶（後書き）

と、いう訳で今回は蒼の魔女、フェデリカの過去をチラリ。そしてトトの正体をチラリ。

でも、作者的には「誰も救わない」の台詞を入れられただけで満足。

因みに、意味はちゃんと合ってる筈。by wiki

## 黒の真意（前書き）

呪文っぽいもの、始めました

## 黒の真意

全ては、予定通り。

日付の変わる鐘の音を聞き乍ら、マクシミリアンは祝杯のグラスを傾けた。城の尖塔、丁度魔帝の寝室に当たる部屋からは静かに膨大な魔力が吹き出している。それは魔帝が目覚めた事を意味するのだ。そんな事実をワインの渋味と一緒に噛み締め乍ら、マクシミリアンは”計画”を心の内で反芻した。

明日、魔帝、皇子、狗に兵を向ける。

全ては権力により近付く為。何時かは魔帝の座を奪い、己やそれに連なる者が其処に就ける様に。権力を、全て掌握出来る様に。

それが、我がトレッシャーの長年の願い。

「重線、ねえ。実に上手い例えだよ」

ぼそり、とマクシミリアンはそう零す。目をさも可笑しそうに細め、ワインの入ったグラスを揺らし乍ら。

（でも）

彼は鼻をフフン、と鳴らす。

そのトレッシャーの願いの本当の意味を知っている者は誰も居ないのだよ。私以外には…ね。

彼は徐に目を閉じ、深く息を吸い込む。そして、管を繋ぎ変える様に、慎重に思考を、切り替えた。

「さて、私自身がすっかり忘れていた計画はどうなるかな」

じわり、と懐かしい何時かの思いが頭を占領してゆく。脳味噌の何処かにぴりりと電流が走った様な軽い痺れが押し寄せ、また直ぐに引いていった。

（何度やっても…此の感覚には慣れん）

マクシミリアンは手近にあったグラスをむんと掴み、一気に中身を煽った。アルコールが喉を灼く感覚に思わず顔を顰める。

重線が意味するもの。其れは誰にも干渉されず、誰にも感知されない、もうひとつの思考回路。故に、幾ら心が読める存在であろうと、奥に仕舞ってしまった考えを探る事は出来ない。

かの先人は其れを思考棄却と呼んだ。

帝家と同じく地の民の系譜を引く、トレッシャーの人間のみが持つ事を許される異能。圧倒的な帝家の力から魔術の民を護り得る唯一の抑止力。この力のお陰で本来の目的を悟られることはなかったことを考えると、思わず苦笑が零れる。何という因果なのだろう。

目障りなのは、貴方の方ですよ。シャル・サルタイアー。いえ、  
…の尖兵。

もうひとつのせかいから  
唯一向に見つめている、

私は矛盾を切り捨てる者  
私は矛盾を内包するヒト

故に、

矛盾を合理に変えねば成らぬ

一反転せよ《Retournez - vous》

オモテとウラ  
もうひとつの思考回路よ

私は唯<sup>ひと</sup>人民の為に  
貴方は唯<sup>じぶん</sup>己の為に

この異能<sup>ちから</sup>を振りかざす

歡喜<sup>よろこび</sup>は何処へ眠る  
悲哀<sup>かなしみ</sup>は何処で待つ

そしてそれは、  
誰<sup>たがため</sup>が為に存在<sup>あ</sup>するのだろうか

## 黒の真意（後書き）

まさかの展開に私が一番驚いている、ハズ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1518m/>

---

極彩は踊る

2010年12月11日13時44分発行